

明治時代の文學及其後文壇の種々相

東京日日新聞
文藝記者

千葉 龜雄

文學は普通に有閑人の遊戯と考へられてゐるが、決してそんなものではない。正當に言へば、文學とは理性と感情との優れた方向を表現するものであつて、國民の感情は之に依つて現れる。曾てロシア大使館にゐたスバレン博士は『横目で觀た日本』と云ふ著述を遺して行つたが、それには時の首相若槻氏が愛酒家として大評判である事實を指摘して、大臣と云つたやうな高官の行動が一世の人心に影響を及ぼすものとすれば、もつと好い影響を及ぼす方面のこと、例へば小説とか映畫、劇などを愛好されてはどうかと云ふ意味の事が書かれてある。全體日本の大臣たちは文藝方面の事に關心が無さ過ぎる。それがあれば、もつと政治の形は變るに相違ない。政治の要諦は人情の深奥を知る事である、だから外國の政治家には文學に親む者が多い。どうか將來は日本の政治家も此の方面に十分の關心を持つて貰ひたいも

のである。故濱口首相は、地方官會議の席上で、一場の訓示を與へて、思想惡化の原由を論じ、殊に文學からの影響が多いことに言及して、嚴重に取締ることを命じてゐるが、首相の訓示が文學の事に觸れたのは恐らくこれが最初であらう。今日左翼運動は警察力に依つて嚴禁されてゐる形であるが、文學運動だけは公然に、而も頗る際どい所まで進んで行はれてゐて、殊に此の方面の知識が無くとも入り易く、同時に又效果的でもある所から、隨分盛に其の運動が行はれてゐるやうである。故に文學に關心を持つといふ事は、何人にも極めて必要であると云はねばならぬ。

二

そこで、現代の文學はどう云ふ動向を持つてゐるか、これは甚だ緊要な問題であるが、昭和の文學を説くには其の前驅時代たる明治の文學から觀察して行かないと手が、りが附かない。そんなわけで私は先づ明治文學變遷の大體を述べて見たいと思ふ。

明治時代の文學は、明治元年から十八年までを第一期、十九年から日清戰役のあつた明治二十八年までを第二期、二十九年から日露戰爭のあつた明治三十八年までを第三期、三十九年から四十五年までを第四期と分けて説明するのが便宜である。

第一期の中で、明治十年の西南戰役後二三年までの間には、記録する程の物が殆ど無い。多くは徳川

時代の餘流を受けた草雙紙、讀本式のものばかりで、作家としては假名垣魯文などもゐたが、概して野卑な述作である。ところが明治十八年に成つて、坪内逍遙先生が『小説神髓』を書かれた。これは我が日本で、文學が如何に書かるべきかの理論を示した最初のもので、中には多少の矛盾もあるが、從來の文學に於ける勸善懲惡、因果應報主義を打破して、文學は有の儘を忠實に書くべきもので、道徳に律せらるべきでない事を痛論された點は確に日本文學史上に特筆すべき偉大な成績である。明治文壇の注目すべき作家たちが出たのは、多く其の後の事であつて、二十二年には代表的二大作家としての紅葉、露伴が出、柳浪、鷗外、篁村などの人々も相踵いで出て、茲に明治文學隆盛の起源を開いた。此の思想の流れは明治二十八年まで其の儘續いて、日清戦後から又別な潮流が起つてゐるが、私は大體に於て、此の明治二十八年までを反抗時代と名けたい。尤も其の中には、種々の思想が含まれてゐるが、最も大きな主流は、今までのものが果して正しいか否かといふ疑を持つて、若しそれが正しくないならば之を戦ひ破らねばならぬとの思想である。例へば福澤諭吉先生の如きは『楠公權助論』を説いて、楠公の湊川戦死は徒死である、何故生き存らへて最後まで南朝の爲に戦はなかつたかを論じ、それが當時の問題となつたが、これは明かに封建時代の思想に對する宣戦である。從來婦人の再婚を不貞視して、貞婦は二夫に見えずとしたのに反抗して、自分の娘を再嫁させたのも同じ思想の動きである。そして斯かる思想の文

學方面に現れたのが逍遙先生の述作である。

他の一方で又、政治小説の流行した事も、此の期に於ての注目事である。これは主として自由民權の思想が旺盛を極めた明治十年乃至二十三年頃のもので、藩閥政府を攻撃する爲にビーコンスフィールドなどの思想を取り入れて書かれてゐる。作家として最も聞えたのは末廣鐵腸で其の他には柴東海散史などがある。今日残つてゐる物だけでも約七八十種に上るといふが、藝術的には多く言ふに足りない。併し民間には可なり思想的な刺戟を與へたらしい。そして是も、文學を政治上の目的に利用した一種の反抗である。

なほ別方面で注意すべきことは、明治二十一年に二葉亭四迷が現れて、ロシアの作家ツルゲネフの『ルイヂン』を翻譯した事であらう。四迷は此の譯述に、從來の日本文學作品には見られない新語を用ゐたので、それが明治文壇に新紀元を聞いた。四迷に稍先だつて、山田微妙が言文一致の新體を開いてゐるが、其の意味で、四迷と微妙との二人者は、日本の文體革命の端を開いた功勳者であると云つて可い。微妙の後には、堺枯川氏が出てやはり言文一致の爲に力を盡したが、其の初を成したのは四迷と微妙とで、紅葉が西鶴風の文體を築き上げて成功したのも其の後であるし、露伴が郵便局を止めて小説家に轉じたのも明治二十二年ごろの事である。此の紅葉、露伴の二作家は、明治文壇左右の巨匠と呼ばれた

が、紅葉は多くの弟子を作つたのに對して、露伴は殆ど弟子らしいものを持つてゐない。孤行獨立である。隨つて一つの格を作つて其の作風を傳へるといふ事をしなかつた。ところが紅葉の方は、頗る世話好きで、同時に親分的な稚氣があつたから、進んで人の世話をして、死ぬまでには隨分門下を作つた。泉鏡花、小栗風葉、柳川春葉、徳田秋聲などはその錚々たる者であるが、紅葉は常に是等の門下を監督して、自己の型に入れねば承知しなかつたから、其の點で紅葉門の作家は皆可なり師匠の影響を受けてゐる。只ひとり秋聲だけは、紅葉晩年の入門の爲でもあらうが、全然作風を異にしてゐる。此の人が、今日なほ文壇に生命を保つてゐるのは、時代と共に移る敏感性を持つてゐるからである。

第二期即ち明治二九—三八年の大半は、反抗時代に次ぐ懷疑時代である。少くとも明治三十三四年頃までの文學は懷疑文學である。在來の風習思想を、これからの明治人が守り續けていゝか否かの疑ひが思想としても寧ろ文學に強く現れてゐるのである。第一期には、封建時代の思想に對して福澤翁が、勸懲文學に對して坪内逍遙先々が、官僚内閣に對して政治家が疑ひを抱いて反抗したが、此の期には先づ、主として傳統的な風習に對しての疑問が、文學の上に現れた。徳富蘆花の『ほととぎす』は、即ち傳統的な家族制度の上に於ての疑を問題にした作品の一例である。在來の習慣に従ふと、妻は家に對する存在で、夫の對偶ではない。隨つて夫の意志如何に關らず、一定の最高指令者の力を以て任意に之を動

かすことが出来る。故に作者は、川島浪子と云ふ若妻を點出して來て、其若夫人が肺を病んだのについて、其の夫の母は、我が子の承諾をも受けずに、家の爲であると稱して離縁した、これは果して何處まで正しい態度であるかと云ふ大きな疑問を社會に投げた。それが即ち『ほととぎす』である。婦人が争うて之を讀んだのは、その疑問が強く女性の胸を打つたからである。次には菊池幽芳の『己が罪』が出た。これは、男女共若い時には素行上過失を犯す事が多いが、さうした過失の結果、子を生んだ婦人が、新しく結婚生活に入つたとすれば、彼女は其の結婚前の行爲に對して、どれだけの道徳的責任を負ふべきものであるかを疑題としたものである。即ち、幽芳の此の作では、箕輪環といふ一女性が、或る學生との間に生れた子供を、親知らずで房州へ遣つて置いて、新に某華族と結婚し、偶々夫と共に旅行した所が、其の旅先で圖らず前の子と廻り合うて烈しい母性愛を感じつゝも、現在の夫との關係を思つて煩悶する事を描出し、其解決法を世に問うたのであつて、これが亦非常に迎へられた。次に今一つ戀愛問題を取扱つて、在來の戀愛に對する疑問を投げたものに、小杉天外作の『魔風戀風』がある。これは約婚關係の女と、別な女性とを愛の對象とする青年學生の三角關係を書いたものである。

それから稍時を遡つて、婦人問題を取扱うた女性作家樋口一葉の作がある。今までの日本婦人は只管に弱いものとされて、因襲の強壓の下に徹底的な服従を強ひられてゐた、乍併果して女性はそんなに迄

弱々しく、一生を只涙で暮らさなければ成らないものだらうか、其の疑をさらけ出したのが一葉であつた。此の作家は僅に二十八歳で肺を病んで死んだが、恐らく日本の女性文學者中、空前絶後と云つても可い位の偉大な作家であらう。遺作は比較的少く、全集と云つても五百頁程しかないが、どの作品も皆光つてゐる。今日の女性の前には、只泣いて運命に隨ふか、自暴自棄に陥るかの二途しかないことを書いたのが『二筋道』で、便ない境遇に置かれた美しい少女が、揉まれ揉まれて遂に妾に落ちてゆく徑路をしんみりした筆で書いて、斯かる悲哀に對して何處までも戦はずに、只運命に隨ふのが女であらうかと云ふ大きな疑ひを出してゐる處に作の大きな意義がある。『十三夜』なども涙ぐましい作である。

次に又、人道主義的な疑ひを書いたのが、島崎藤村の『破戒』である。明治維新の際に四民は平等である、其の間に何等の差別もないと明らかに宣布せられたにも關らず、地方によつては今なほ不可思議な差別待遇を受けてゐるいたましい人々がある。これは確に大きな不合理であるが、而も社會は之を因襲に放任してゐる。『破戒』は即ち、斯かる不合理が何故に未解決の儘で置かれてゐるかを世に訴へた作品である。作中の主人公丑松は、此の不合理な差別待遇を與へられてゐる一團の中に生れたが、親の注意に従つて身分を包んで小學教員となつてゐる中に、同村の人に出會ひ、秘密が漏れた爲に苦悶して、最後に一切を告白して國を去る、と云ふ事を書いたもので、これはドストイェフスキーの『罪と罰』からヒ

ントを得た作だといふが、これ亦民族的な差別待遇に對する疑を基調とした一種の反抗文學である。

最後に、社會主義を取扱つたものに、木下尚江の『火の柱』良人の『自白』がある。これは明治二十八年の戦役後、富豪の力が一層大きく現れて、大別荘を建てたり色々の豪奢を盡したのに對する憤激の思想が、當時佛蘭西から入つた社會主義思想と一緒になつて、それが藝術を通じて現れたものである。

全體、思想的に明治以來の文學を見ると、明治時代は國家主義の文學、大正時代は個人主義の文學、昭和時代は社會主義の文學である。明治時代には民衆の間に國家觀念が強、富國強兵といふ事が腦裡に深く印銘されてゐたから、文學も其の方向を取つて、道徳觀念と歩調を合はせた。故に文學は文學として獨立することを許さず、必ず善の文學たることを要すとした。故に少しでもそれに背いた物は、甚だしく非難せられ、發賣禁止の行政處分を受けた。随つて文學者の素行も亦同様の眼を以て觀られた。前に述べた山田微妙は曾て女流作家の稻舟女史と結婚生活を營んでゐたが、不成績のため離婚して稻舟は郷里に歸り、後毒を仰いで自殺した。ところが東京の某新聞は直ちに之を問題として、微妙は妻を窘め殺したものであると罵り、同時に微妙の素行を許して、淺草の不潔な女性と關係したことを公にした。微妙は之に對して、作家には經驗が必要である、予は只經驗の爲に淺草に赴いたに過ぎないと辯明したが、文壇は之を寛假せず、作家は經驗に名を藉りて罪惡を行ふの權利ありやと眞向から叩きつけた。微

妙は遂にそれが落ち目になつて、陋巷で窮死したが、斯ういふ風に、作家個人にも作物にも道德的な檢束が烈しかつた。ところが、後には其れが段々崩れて來た。

明治三十八年には日露戦争があつて、國民は一般に戦争氣分に昂奮したが、それが爲に愛國文學、戦争文學は起らないで、反對に國家主義の文學から個人主義の文學への歩みを取つた。西洋の科學が盛に入つて來た結果として、眞實を深く考へることが要求され、人生、社會を新しく見直さうとする傾向が強くなつた。その思想が文學にも現れたのである。與謝野晶子の『君死にたまふこと勿れ』と云ふ詩は此の時の作である。これは、大阪府の堺市で羊羹屋をしてゐる弟が、召集されて兵に行つた、其の弟に對して、お前は死ぬ必要はない、商人には商人として與へられた職能がある、お前は商人として國家に盡せばいいのだ、陛下も死ぬとは仰せられまい、と云ふ事を歌つたものであるが、實に大膽な言葉であつて、當時我々は見て驚いた。大町桂月などは非常に憤慨して罵倒した。勿論これは藝術的良心から述べたものではあるが、兎に角こんな思想は日清戦争の頃には出なかつたものである。

乍併思想としての個人主義は、既に其の前から現れてゐた。即ち高山樗牛が、ニイチエ思想を基調に本能主義を唱へて、大に個人主義を論じた。ところが明治三十四年頃になると、新に又自然主義文學が起つて來た。最も早く之を書き出したのは小杉天外で、一體、物には善惡の價值判斷を加ふべきものでは

ない。故に作家は只有るが儘の自然を描寫すればよい、假令汚ない事でも存在するが儘に書けばよいのだと云ふ主張の下に、作品を出した。例へば遺傳性を受けた或る家族の娘が、夫以外の男子と關係した、これは科學から云へば一個の事實であつて、それが爲に善いとか悪いとか云はれる責任はない、と云つたやうな内容の小説を、天外が書いてゐる。それから約四五年の間、即ち明治三十八九年頃までは、此の種の自然主義文學が盛に行はれた。田山花袋の『蒲團』なども其一つで、密に想を懸けてゐた女弟子が出て行つたあとで、其の蒲團のほひを躡いだ、と云ふ肉感的な描寫をしたものである。少し前ならば斯うした作物は、文壇の内部でも、道徳的に非難されたのであるが、此の時分には既に、藝術上眞を書くのは正しいと云ふ事を認めたのである。乍併、日露戦争時分の忠君愛國思想とは飛び離れたもので、同時に甚だ暗い氣分に満ちたものであるので、教育界から烈しい抗議が出て、その結果發賣禁止が頻出した。永井荷風などは引續いて二三度も其の處分を受けた。明治も四十三年頃までは、やはり此の調子が惰性的に續いたが、併し、これではいけないと云ふので、宗教的方面では綱島梁川、他の一面では夏目漱石、谷崎潤一郎などが出た。そして是が明治文學史の最後を飾つた。漱石は大體胃病持ちである。胃病患者は皮肉なものであるが、漱石の皮肉は殊に痛烈で、同時に江戸人特有のユーモアがあつた。漱石は『倫敦塔』のやうなものを書くかと思ふと、又、『猫』や『虞美人草』のやうなものを書いたので、どれ

が其の作の本流であるか分らないが、兎に角『猫』や『坊つちゃん』は明るさに富んだもので、自然主義では書けない気分である。後には心理小説的になつて、『闇』などを出したが、傑作は中期にある。

三

明治時代は、明治天皇が大山の崩れるやうにも隠れになつて、それで終つたが、次に來た大正時代は文學界に於ては整理時代であつた。明治から昭和へ橋を架けた時代であつた。偉大な作家は出なかつたが、文壇には色々の變化があつて、三つの形が出た。其の一つは人道主義の文學である。武者小路實篤、有島武郎等の所謂『白樺』派が唱へたもので、殊に有島はリビングストン傳などを書いて、世界大戰の最中に戰禍の悲惨を説き、虐げ惱まざるゝ者の救済を説いた。其の第二のものは新現實主義である。自然主義では、表面的な性格描寫をするだけで、例へば犯罪者を書く場合にも、彼は何故に罪を犯すに至つたかと云ふ心理現象を書かない。そこで其點に注目して、突込んだ作を書いたのが、里見弴、菊池寛、芥川龍之介等の人々で、菊池の『忠直卿行狀記』などは、殊に代表的な傑作である。忠直卿は暴君の代表的典型で、從來は鬼畜のやうに考へられ、憎惡の標的として見られたものであるが、此の作者はそれに哀憐を感じた。如何にも忠直の行動は非人道的であるが、それは彼の性質が悪いのではなく、大名といふ生活、境遇がわるいのである、全體人間は反抗無しに生きられるものではない、然るに大名の前には

反抗がない、これは實に反抗を欲する人間に取つて、不愉快な寂しい生活である、乃ち忠直は、大名なるが故に、あの兇暴を取てしたのである、と見て、その心境を書いたのが、あの行狀記である。こんな風に人間の心理を細かく解剖して書いた作家は、今まで一人もなかつたのであつて、菊池は眼こそ小さいが人の胸を貫く視線の鋭さは實に恐ろしい。菊池の作のテーマが人を打つのは、其の點である。次に最後の一つは、新技巧派の文學である。自然主義では、文章に重きを置かなかつた。技巧を主にして書いたのでは、自然が壞される、だから現實曝露でいゝとして、文章を粗末にした。自然主義以來、文章が漸く下拙に傾いたのは著しい事實である。そこで、それに反抗して立つたのが新技巧派で、如何に内容が優れてゐても、非藝術的な粗雑なものは文學ではない、これからの作品は技巧を練らねばならぬと主張した。芥川龍之介、久保田萬太郎、里見淳、志賀直哉などは、此の派の人々である。

ところが大正の後半期に入ると、俄然として又反抗時代を現出した。大正九年の經濟恐慌などが動機となつて、デモクラシイの思想が入り、凡てに平等を望む聲が大きくなつて來た。そして社會主義的な小説が現れ始めた。幸徳秋水は勿論、中里介山なども之に觸れた。所謂プロの本が盛に出るやうになつたのは、勿論昭和改元以後であるが、萌芽は此の大正八九年頃から跡づけられる。尤も當時は系統の清算が行はれないで、AもBも混淆してゐたが、大正十年に『種蒔く人』といふ雜誌が出て、金子洋文や、

前田河廣一郎などが、書き出した所が、それが勢力になつて、リベラリスト階級の人が皆之に投じた。一方では又、『改造』とか『解放』が出て、殊に『解放』の方は、麻生などが編輯に居て、社會主義的な精彩が多かつた。大正十二年九月の大地震は、一般に大きな恐怖を興へて、それが爲思想上の取締は更に嚴密となり、『種蒔く人』なども滅びて、十三年は社會主義的文學の崩壊時代であつたが、十四年には又少し盛り返し、斯くして昭和時代に入つた。

四

大正の前半に現れた人道主義派、新現實派、新技巧派などは、十二年頃に成つてもう可なり衰へて、次いで現れたものは新感覺派の文學である、其派の人では、横光、中河、十一谷、池谷等が算へられる。

此の頃は文士の生活が一般に安樂に成つた時で、それが爲に内生活がルーズに流れ、みんなが小さな個人的享樂にかまけて、大きな世界の事を考へなくなつた。そこで多くの作品は墮落して、内容の無いものと成り、只もう感覺の享樂のみを尊んで、其の氣持を現すために、非常に優れた技巧を磨いた。これが新感覺派とも、新々技巧派とも呼ばれる理由で、忽ちの内に新技巧派の志賀や里見を超越して、優れた藝術を磨き上げた。横光の作中に、「汽車は停車場を小石のやうに黙殺して通つた」と云ふ表現があるが、これなどは珍しい現し方として注意された。乍併其處に現代文學の行き詰りがあつた。文學が衰

へ始めると、萬人同調で、最早何人の作にも讀者は胸を打たれなくなつたのである。そこで文學の行詰まりといふ事が、讀者の中から問題となつて、將來の世界、國家、社會はどう成るのか、それを藝術の上で見たいと叫んだ。しかし文壇は、それに答へないで、ブルブルに推移して、大正から昭和になつた。プロ作家以外には、光つた作品を出した者がなかつた。讀者は腐朽した作家に白い眼を向けた。

ところが、其處へ出たのが新興藝術派である。これは藝術がマルキスト一派の爲に征服された形に成つてゐるのを憤慨して、之に對抗する意味で起つたもので、其の中には各種の分子を包含してゐたが、それでは今までのものより優れた藝術を作つたか、又マルキストを征服し得たかと云ふと、依然として題材を採るのは社會の消費面のみで、それもウェートレスと戯れると云ふやうな空虚な華やかなこと以外に出なかつた。エロとかグロとかの語が頻りに流行し出したのも此の頃からで、健康な國民に必要な健全な文學は少しも生れなかつた。そして昭和三年以來は、殆ど創作を絶つて、段々勢力が無くなつて了つた。

そこで過去六年の昭和の文學界を顧ると、一番盛であつたのは、昭和四年で、プロ文學が大に出たのも此の年であるが、此の方の作家も、一二年書き續けると、大抵皆變つて、理窟ばかりは喧ましくても、大した作を出さなく成つて了ふ。大體又、書く世界が甚だ狭い。労働爭議とか留置場とか、乃至レボを

播いたとか、十人が十人とも殆ど同じ事を書いてゐる。それで、文章でも巧であるかと云ふと、これ亦甚だ面白味に缺けたもので、同系の思想を持たない者が共鳴し得ないのは勿論、同じ思想の中に生活してゐる人々は、自己の苦しい生活を再現して見せられることを好まないから、二た道共に不成功であつた。そこで、之を盛にする爲には、農村、工場の人々にも分る程度の安易な物を作つて、大衆の中に食ひ入らねばならぬとして、其の方に又新しい力を注いだが、大衆は水戸黄門記や赤穂義士傳に熱中して外を振り向いて見ようとしなかつた。

斯ういふわけで當面の文壇は、明治時代から幾變遷して、今や沈滞の世界に入つてゐる。既成藝術の人々では、菊池寛が、まだ頻に書いてゐるが、大きな物を望めさうにもなく、藤村も『夜明け前』を執筆してゐるが、叙述のまだるつこさが目につく。今後誰が國民をどう打つかは、全然疑問である。

五

そこで、今日の文學はどんな形を取つてゐるかといふと、一つは純文藝、他の一つは通俗文藝で、これは普通に、大衆藝術とも呼ばれてゐる。「大衆」の語は佛敎語から出てゐるといふが、大衆文學といふ新稱は大正十二年から始まつてゐる。其の前に「民衆文學」といつたのを呼びかへたのであつて、要するにインテリ以外の誰にもわかつて、國民大衆の感情を高める爲のものである。今までの藝術は貴族が築

き上げたもので、團十郎の芝居は、如何に優れた藝術であつても、場代が高い爲に、之を見ることが出来るのは貴族富豪階級、有閑階級に限られ、一般民衆は少しも觸れることが出来ない、故に今後は安いで藝術を味へるやうにして、民衆にも藝術を興へることが必要である、と云ふ事を建て前に生れたものである。今日では大衆文學と云へば、皆所謂のチャンバラ式の劍劇物として受取られてゐるが、常識では、比較的低級な知識水準の人々に訴へる文學と解すべきである。併し事實果して、さう成つてゐるか否かは疑問である。

兎に角、今日讀者層の最も厚いのは通俗文學であつて、其の中には、通俗戀愛小説、劍劇小説、探偵小説の三つを含んでゐる。故に單行本でも純藝術派の書いたものは、二千乃至三千部位しか出ないが、大衆文藝物は普通一萬から二萬、人氣を博したのものなら更にヨリ以上に出る。鶴見の「母」などは十萬部を突破した。それから新聞の續き物小説も亦、非常に歓迎される。それで、新聞經營者の間では、續き物の小説が、いつも大きな悩みの種に成つてゐる。少くとも讀者の二割は小説に依つて獲得することが出来ると同時に、又、購讀を中止しようとする讀者を同じ率で引留めることが出来る。明治八年に初めて新聞紙に小説が出た時には、福池櫻痴などが反對して、忙しい紙面に有閑的な小説を載せると云ふことは意味を成さないと排斥したものであるが、四五年たつと、今度は、其の反對の急先鋒が、自らビ

ニンスフィールド物か何かを譯出する始末で、今日では必須の要件になつた。此の小説讀者の力は非常に恐ろしいもので、作中の或る人物に對する人氣が募つて來ると、必ず誰と誰とを結婚させ、結婚させなければ新聞の購讀を中止するといふ高壓的な投書が盛に飛んで來る。實に眞劍さ其のものである。それで或る新聞小説の評判が高くなると、續いてそれが舞臺に上され、又、蒲田とか日活とから映畫にして持つて出るから、彌々評判が高くなる。

次に劍劇物は、現に直木、吉川、大佛、長谷川などの人々が盛に書いてゐる。併し面白い事に、此の種の小説の取材範圍は、徳川末期から元祿頃までの時代に限られてゐる。元龜天正頃まで遡ると、もう受けない。又、耶蘇教を題材にしたもの、謀叛人を書いたものも歡迎されない。ところが幕末物になると、殆ど同じ人物を取つて來て、それに有る事無い事の尾緒をつけて出せば、きつと讀者を引きつける力を持つてゐる。滿洲などでも盛に讀まれてゐる。

第三は探偵小説であるが、これは將來永く續いて大衆受けがするかどうか疑問である。我國では黒岩涙香が萬朝報に書き始めたのが探偵小説の元祖である。都新聞に出た「人か鬼か」は、殆ど原文を離れて日本人向にうまく點綴しつつ、筋を運んだものであるが、非常な評判であつた。それで涙香以後にも、水田南陽とか其の他追隨者が相當に出たが、もうあまり振はなかつた。ところが約十年程前から西洋で

探偵小説が流行り出した餘勢を受けて、「新趣味」「新青年」などが、新に又探偵小説熱を煽り出した。しかし幾らか受けたのは最初のうちだけで、科學利用の犯罪とか、奇怪な家屋の構造がどうしたとか云つても、新に日本で探偵小説を創作すると成ると、テンで生活様式が西洋とは違ふから、探偵小説には成らない。

さういふ次第で、現代日本の文學で、最も受けるのは、兎に角通俗小説で、次が藝術小説である。藝術小説も其の間に盛衰はあるが、大體に於て思想的にも大正は明治より、昭和は大正よりも進んでゐるし、文章の方はヨリ以上に進んでゐるが、日本の近代文學は殆ど世界に知られてゐない。外國に紹介されるのは、いつでも能とか、源氏物語とか云ふ類のクラシック文學のみで、其の他では竹友藻風が藤村、鷗外等の作を譯した物くらゐであらう。恐らく腕くらべとなれば長篇小説は兎も角、短篇小説では、機構に於ても決して歐洲の作品より劣ることはないと思ふが、それよりも我々が考へさせられるのは、斯ういふ状態である、將來文學はどうなるだらうかの問題である。文學の中でも、今日、小説だけはまだ相當に迎へられてゐるが、詩歌は微力であるし演劇に至つては非常な衰へ方である。それで今日既に一部では文學滅亡論が唱へられさへもしてゐる。人間が文字を使ふ事を廢さない限り、まさか文學が全體的に亡びるやうな事はあるまいが、何にしても餘程考へねばならぬ問題であると思ふ。(溝口生抄録)